第62回 福高祭

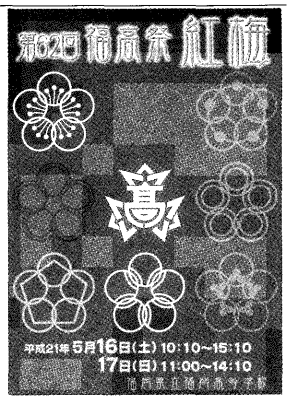
教諭　田鍋　稔（高31回）

私と「福高祭」との出会いは、35年前にさかのぼる。当時中学生であった私は、生物部の展示に興味を持ち、「福高に合格したい」と思った。今年の「福高祭」にも、多くの小学生や中学生が訪れていた。化学部の興味深い実験などを見た小中学生が、35年前の私のように福高にあこがれ、福高を目指して勉強してくれたらと思う。

全クラスで作り上げた中庭に吊された「イチロー」の巨大壁掛け。約2cm四方の色紙を、各クラス模造紙2枚に貼っていく作業。全クラス分が出揃い、1枚の大きな壁絵となるべく張り合わされる。中庭の壁に4階から吊り下げられて初めてそれが「イチロー」だとわかる。企画から製作まで携わった係の生徒にとっては、感無量の瞬間であったろう。ちょうど、WBCで決勝のセンター前タイムリーを打った「イチロー」のように…。

▲高校時代の田鍋さん

「南極領有問題」をテーマに行われたパネルフォーラム。何週間も前からこのテーマを全校生徒に提示し、元南極観測越冬隊の方を呼んでの講演や、ホームルームでの討議を重ねて本番へと臨む。当日のディベートに出場するメンバーの打ち合わせやリハーサルが何度となく繰り返されていく姿を見た時、「南極領有問題」という大人でも難しいと思われるテーマに堂々と立ち向かっていく福高生のすごさ、たくましさ、レベルの高さを感じた。本番当日は、一般生徒も次から次へと意見を述べたのには驚いた。全校生徒1200人の前で、マイクを使って自分の考えを述べることの難しさ、そして何よりもその勇気を持つ高校生がこんなにもたくさんいること、これは何にも代え難い福高の財産であると感じた。



▲美術部が作成したポスター

▶「イチロー」の模細工壁画

1・2年生の合唱コンクール、3年生のクラス企画もそれぞれのクラスの色がでており、なかなかおもしろいものであったと思う。

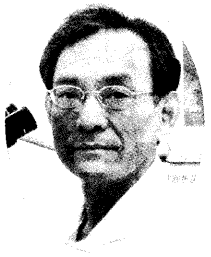
「福高祭」を通して感じたことは、すべて生徒だけの力で作り上げているということ。実行委員会がしっかり機能し、企画・運営・指導・会計、さらに生徒への配布物の文言のチェックに至るまですべて生徒で行われて本番に臨む。組織力、一人一人の持つレベルの高さ、責任力の強さがなければ出来ないことである。実行委員の生徒達は、眠れぬ日々が続いていたのではないかと思う。しかし、このようなきつい思いをした者にだけしか味わえない感動を味わったのではないか。これはお金では買えない一生の財産である。この財産を糧に、今後の人生を歩んでいってもらいたい。

35年ぶりに体験した「福高祭」。そこには昔と変わらぬ福高生の底力が随所に見え隠れしていた。良き伝統をさらにグレードアップしながら次の世代へとまた受け継いでいってほしいと思う。我々教師もまたその伝統の継承者となり、アドバイザーとなって指導していきたいと考えている。

喜界島の奇跡

（地学部OB　皆既日食観測記）

山﨑　誠（高24回）

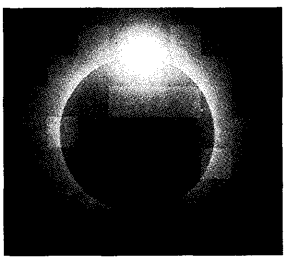


「わー、綺麗！」「きたーっ！」「やったー！」感嘆符付きの叫びが響き渡りました。ここは鹿児島県奄美郡喜界島、2009年7月22日午前10時56分の事です。そう、まだ記憶に新しい、日本国内で46年ぶりに見られ、今世紀最長と騒がれた皆既日食です。ここ喜界島では、薄雲を通してではありますが、まさに奇跡と言って良いでしょう。3分間ほどの皆既を全て見る事ができたのです。

鹿児島を20日夕方出航したフェリー「奄美」で、21日の早朝喜界島に上陸した福高地学部OBの観測隊（大げさ？）は、豊福（高23回）、山﨑（高24回）、永田（高25回）、鄭（高26回）、岩﨑（高27回）の5名。

天文現象はお天気次第で、晴れなければお終い、特に皆既日食は見る事ができる範囲が幅最大200km程の細長い地域に限られ（皆既帯と言います）、皆既が続く時間（継続時間）は正午に近いほど、又皆既帯の中心線に近いほど長くなります。従って、継続時間や晴天確率、目的地への行きやすさを勘案して観測地を決める事になります。

喜界島は皆既帯の南端に近いため、北に行くほど継続時間が長いのですが、観測場所は視界の広さや風、足場、緊急時の事等の条件も考えて決めなければなりません。21日は観測地を最終決定するため、予定地点を見て廻りました。その結果、いかにも自主性を重んじる福高OBらしく意見が割れ、3カ所に分かれて観測する事になりました。



▲第2接触のダイヤモンドリング

さて、日食当日の22日、何と雨音で目覚めました。雲もどんよりと全天を覆っています。天気予報が本職の豊福氏は昨日からノートパソコンで気象データと格闘していましたが、渋い顔でぽつりと「駄目かもしれん」。うへー、そんなあ。しかし、間もなく雨は一応上がり、明るくなってきたし、とにかくやるっきゃ無いので、それぞれの観測地へ散らばったのでした。

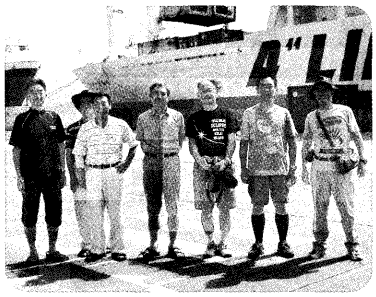
朝のうち厚かった雲は次第に薄くなり、欠けて行く太陽は時々雲に邪魔されながらもはっきり見えるようになり、遂に皆既へと突入！最初のダイヤモンドリングが見えた瞬間（写真）、喜界島中で冒頭の叫びとなりました。皆既日食になると鶏や犬など動物が騒ぎだすとよく言われますが、一番興奮するのはなんと我々人間だったのです。

今回の日食では、薄雲のせいで真珠色のコロナの拡がりはあまり見えませんでしたが、皆既帯の南端に近かったため太陽の最表層の彩層という部分がずっと見えており、その紅色がとても印象的でした。3分間が過ぎ、2回目のダイヤモンドリング（本来これをダイヤモンドリングと言う）が現れると今度は期せずして「バンザーイ」の声が響き渡りました。日本人って、やっぱり万歳が染みついていますね。

お天気の方は皆既が終わるのを待っていたように雲が再び厚みを増し、日食終了後15時過ぎには土砂降りの雨が最後を締め括ってくれました。

今回、屋久島から奄美大島まで皆既が見られなかった中で、我々が行った喜界島だけが見られたのは、「喜界島の奇跡」でしょうか。いや、アナグラムにすると、「kikaijima」→「kaikijima＝皆既島」→「majikaiki＝まじ皆既」。やはり運命でした。

まだ皆既日食をご覧になってない方、テレビや写真で見るのとはその美しさは雲泥の差です。機会があれば、いや、機会を作って、是非ご覧になって下さい。日食熱に冒される事請け合います。



▶右から豊福、山﨑、永田、梶原（高24）、鄭親子、岩﨑